

## VI. BECC 2009/2010 学年末評価報告書

### A. はじめに

文教イングリッシュ・コミュニケーション・センター (BECC) は、2008年4月 (クラスとカリキュラム企画) および同年9月 (文教 SALC) に開設された。本報告書の目的は、2009/2010 学年度の SALC とカリキュラムに関する主要なデータの概観とその解釈を通して、成功裏に終了した分野と 2010/2011 学年度に注意を要する局面とを考察することである。本報告書は最初に 文教 SALC を取り上げ、続いてカリキュラムに焦点を当てる。その後、2009/2010 学年度における BECC の教材と研究活動を概説する。2010年2月に実施された BECC コース、授業、カリキュラムに関する学生評価の詳細を添付資料として加える。

### B. SALC

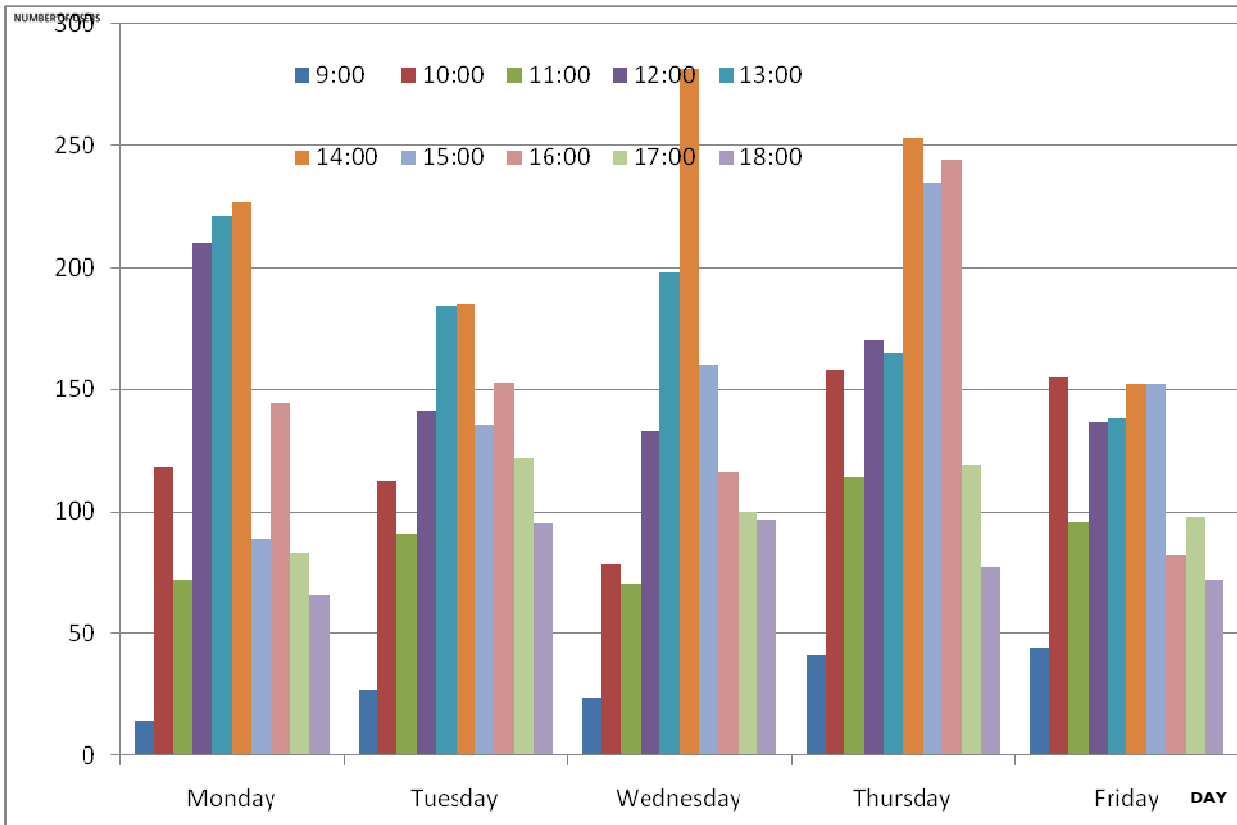
#### 1. SALC のユーザー・データ

2008-2009 年度の 2 学期に、SALC を利用した人は 5,557 名であった。2009-2010 学年度 (2月1日まで) に SALC を利用した学生総数は 14,996 名である。この数には授業における利用は含まれていないが、ユーザー数の内訳を以下に示す。

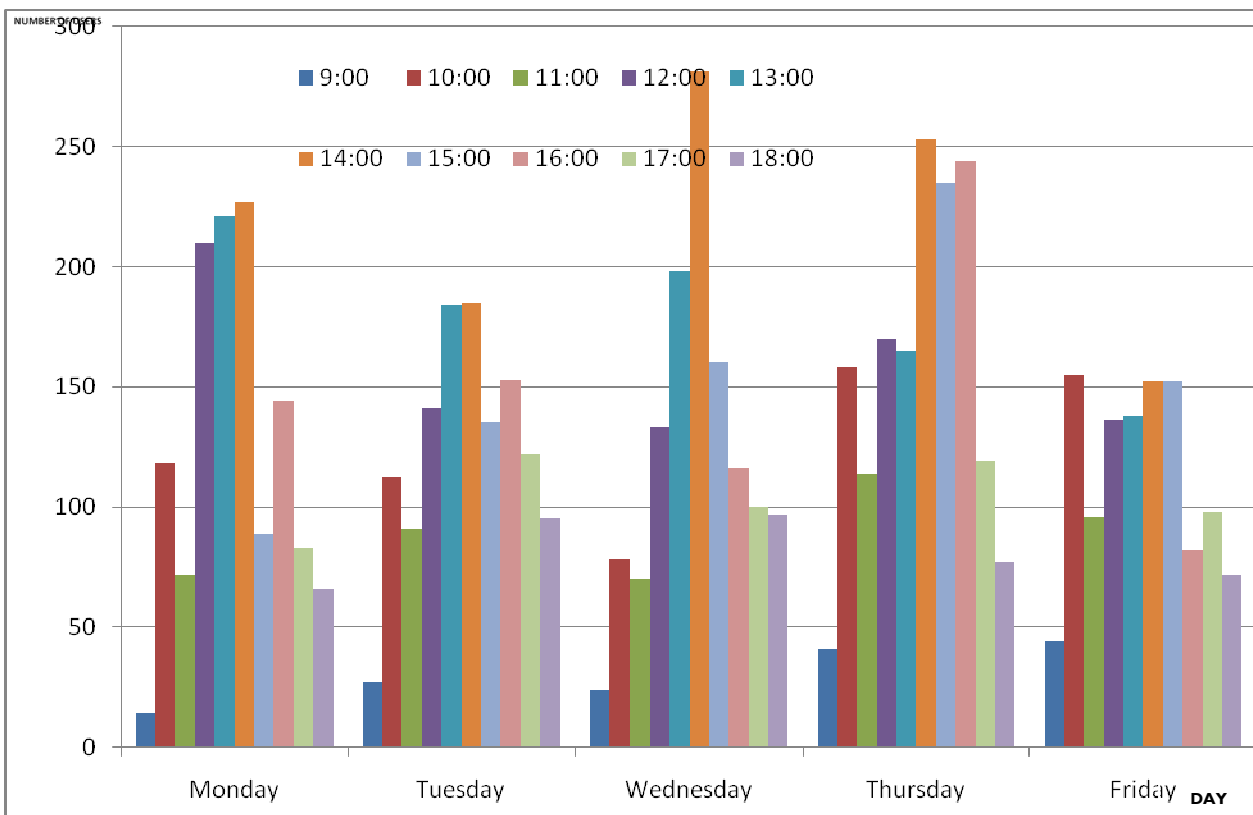
月別 SALC ユーザー数 -1学期					
4月 2009	5月 2009	6月 2009	7月 2009	8月 2009	合計
1965	2468	1474	2415	227	8549

月別 SALC ユーザー数 - 2学期					
10月 2009	11月 2009	12月 2009	1月 2010	2月 2010	合計
1780	1453	1901	1205	108	6447

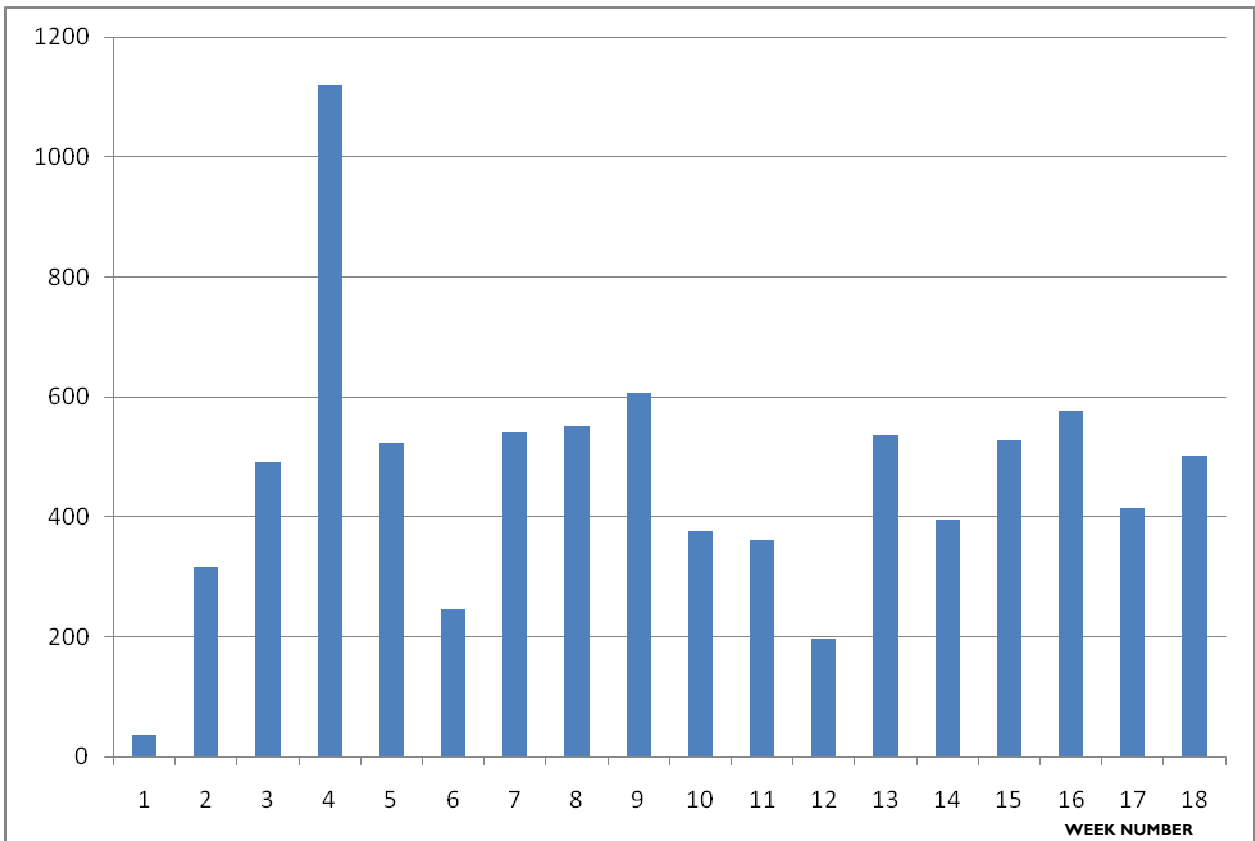
月別の SALC クラス数					
4月	5月	6月	7月	8月	
14	9	9	18	0	
10月 2009	11月 2009	12月 2009	1月 2009	2月 2009	合計
6	14	24	24	0	118



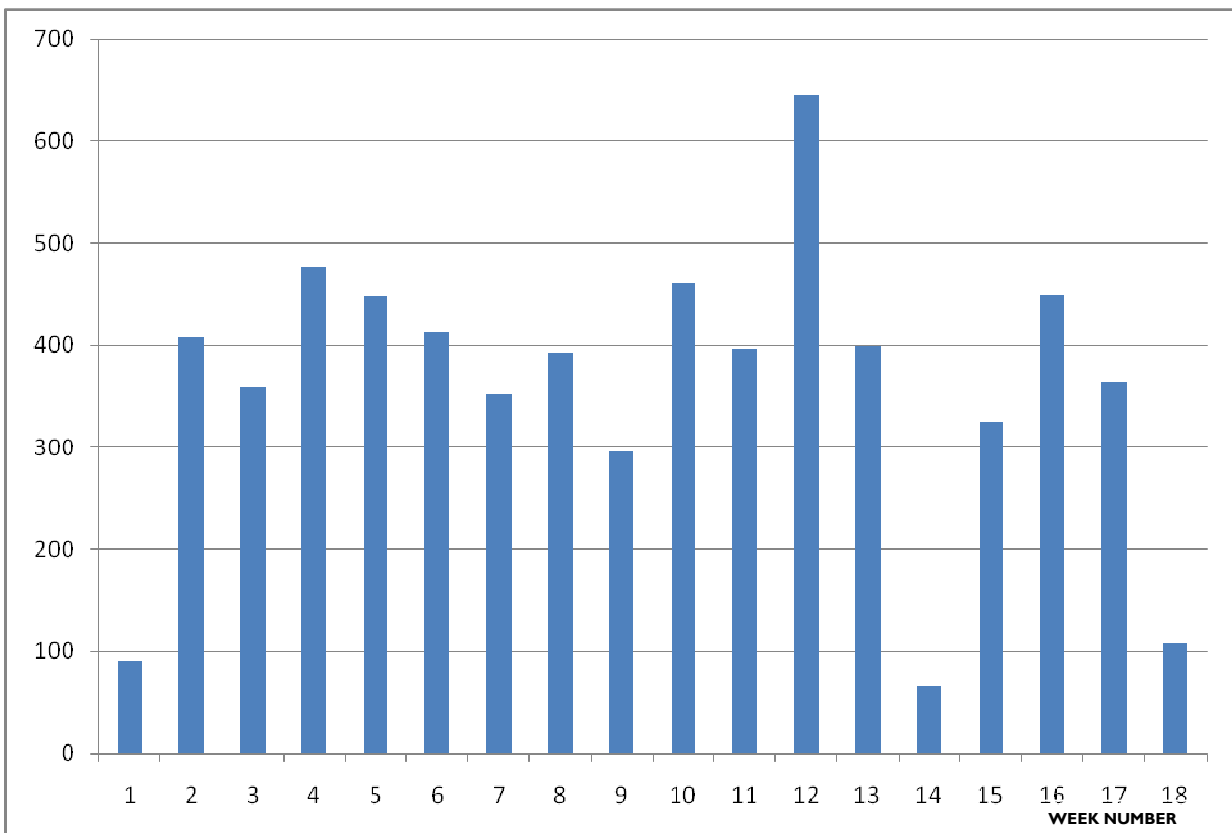
2009年1学期、時間帯別SALCユーザー数



2009-10年2学期、時間帯別SALCユーザー数



2010年1学期、週別SALCユーザー数



2010年2学期、週別SALCユーザー数

利用者数の多い曜日や時間帯は学生のスケジュールに大きく左右され、課題や宿題が反映される傾向にある。しかしながら、英語に対して真摯に興味を持ち、定期的に SALC を利用している中核的な層が存在し、グローバル・コミュニケーション学科に学生が入学すれば、この層は伸張すると信じられる。

## 2. 貸出データ

### 2.1 収蔵教材

現在、SALC から貸し出し可能な教材には以下のものがある。

CD:	6
本 (CD 付きの本も含める)	1548
CD-ROM または DVD 付きの本	38
カード・リーダー:	5
CD-ROM:	10
DVD:	196
ゲーム:	9
ヘッドフォン:	16
マック・コンピュータ:	7
雑誌:	61
音楽 CD:	160
SD カード:	5
スプリッター:	8
トライポッド:	3
ビデオカメラ:	5
ボイスレコーダー:	5
デジタルカメラ:	7
ワークシート:	509
合計:	2598

2009/10 学年度に、かなり多くの学生に SALC の教材を貸し出した。同学年度の学生による貸出記録は 2788 回であり、SALC 内ではさらに多くの教材が利用されている。学部および学年別の利用回数を以下の表に示す。

昨年予測したように、教材を貸し出したのは、教員と最も間近に接する 1 年生および 2 年生が圧倒的に多い。しかしながら、1、2 年生以外の学生による貸出率にも勇気づけられる。SALC の教材を最も頻繁に貸し出したのは初等教育学科および言語学科の学生だが、全学科を通してかなりの貸出がある。

学科別貸出数	
初教:	909
言語:	577
栄養:	530
心理:	235
福祉:	464
付属高校	72
大学院生	1
<b>合計</b>	<b>2788</b>

学年別貸出数	
1年生:	1077
2年生:	1108
3年生:	409
4年生:	121
付属高校	72
大学院生	1
<b>合計</b>	<b>2788</b>

大学1年生の学科別貸出数	
初教:	424
言語:	223
栄養:	182
心理:	137
福祉:	111
<b>合計</b>	<b>1077</b>

大学2年生の学科別貸出数	
初教:	461
言語:	128
栄養:	283
心理:	94
福祉:	142
<b>合計</b>	<b>1108</b>

大学3年生の学科別貸出数	
初教:	22
言語:	184
栄養:	0
心理:	1
福祉:	202
合計	409

大学4年生の学科別貸出数	
初教:	2
言語:	42
栄養:	65
心理:	3
福祉:	9
合計	121

### 3. 学習指導と教育サービス

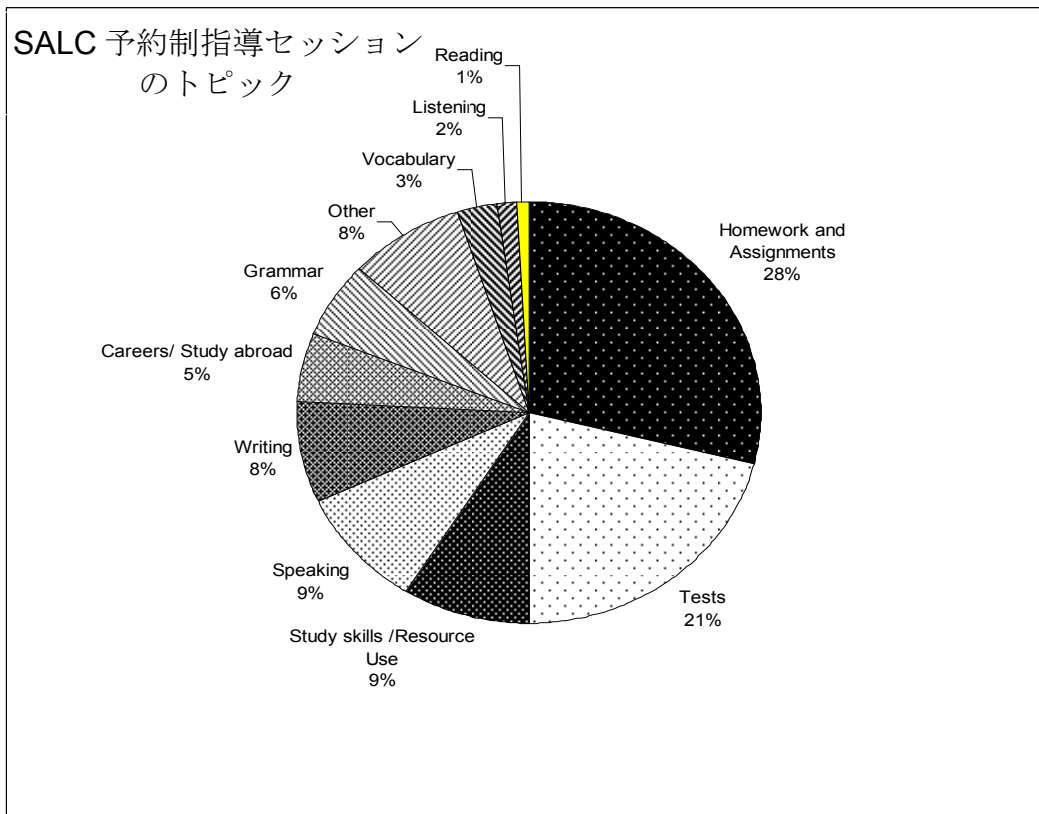
#### a. 正規の指導セッション

正規の指導セッション 2008～2010		
	2008-9	2009-10
1 学期	35	111
2 学期	78	160

開講以来、予約制指導セッションの人気は高まり、ラーニングアドバイザーは、非公式な形においても学生たちに学習上の支援を与え続けている。指導サービスは前年に比べてより頻繁に促進されたが、2010-2011 学年度においても引き続き、本サービスに対する学生たちの認識のレベルを高めるためにとり組む所存である。

一人一人の学生に合ったサポートが得られることを学生たちに広く知ってもらうために、ラーニングアドバイザーは 2010 年の早い時期に新入生を対象に一連のオリエンテーションを行い、指導サービスと SALC をより全般的に促進する予定である。

指導上のトピックは、主に宿題や課題、および TOEIC 関連の学習に集中しているが、それ以外にも、以下の円グラフに示すように、学生たちが求めるアドバイスは広範囲に渡っている。



#### 宿題と課題

テスト

学習のコツ/教材の使い方

スピーキング

ライティング

就職/留学

文法

その他

語彙

リスニング

読解

#### b. SALC ワークショップ

昨年度のワークショップ参加率の低さに対処すべく、本年はワークショップの目的と内容に対する学生の理解が深まるような手段を講じ、また学生たちのニーズに関してより多くの情報を得るべく意見調査を行った。集中的に案内を展開しトピックを厳選したにもかかわらず、ワークショップのイベント参加の申し込みは少なく、その反応はあまり肯定的ではなかった。学生たちのスケジュールが詰まっていることがその主たる理由だと思われる。この点に対処すべく、2010-2011 学年度には、学生たちに関心のあるトピックを選んで提供する計画である。学生はラーニングアドバイザーに予約を入れ、授業時間に重ならないよう彼らの便宜に合わせて、一人で、友人と二人で、また時には少人数のグループで特別学習セッションが受けられるようにし、また年間を通してセッションを開くようにする。名称も変更する。文教には 同じ名称ながら SALC のワークショップとは著しく異なるクラスがあり、これらのセッションをワークショップとは呼ばないようにする。

## 4. 教材開発

### 4.1 SALC 課外活動の開発

本年、ラーニングアドバイザーたちは、BECC のカリキュラムをセルフ・アクセス型学習に連携させる一連の活動の作成に尽力した。これは前年度にヘミッシュ・ギリーズが実施した活動を土台としており、1 学期（とくに第 4 週）に時として人材や教材が足りなくなった状況を踏まえて、これらの資源に対する依存度を抑えるよう調整したものである。自立学習をモデルとした活動範囲が使用されたが、それは、ある程度規定されているものの意欲を喚起させる活動から、より意識的に課題に取り組みその結果を踏まえた活動へと学習者を導くものである。

## 5. スタッフと人材育成

### 学生スタッフ

本年、飯田桃子と石田玲は学生スタッフのさらなる向上、訓練に取り組んできた。5 月に 4 名のスタッフが新規採用され、SALC の上級スタッフが彼らの訓練指導に当たった。飯田と石田は、SALC の全体的な役割、SALC 内における各自の立場、SALC のサービスを文教の他の学生に促進する際に学生スタッフが果たす重要性に焦点を当てながら、学生スタッフ全員に訓練セッションを行った。

飯田と石田は本年、広範囲にわたるコンペやキャンペーンを担当し、BECC のサークル活動を支援し続けてきた。さらに、コンピュータ関連、予算、機器類、デザインや他の管理上の支援を提供し続けてきた。

## C. カリキュラム

### 1. 2009/2010 学年度第 2 学期の授業評価

BECC の全教員は、学生評価とフィードバック過程の一環としてコース評価を終了した。本評価の一環として、2 学期用の公式な授業評価報告書の作成に当たり教員たちはあるクラスを選ぶよう求められ、そのクラスを対象に「授業」に焦点を当てた 12 の質問がなされ、その結果が公式な目的に採用された。

### Evaluation of Teaching

	Lee	Jack	Luke	Caleb	Hamish	Tuan	Brian	Kirsten	Gene	Average
教員は授業に遅刻しなかった The teacher was on time for lessons	4.54	4.89	4.11	4.40	4.38	4.76	4.32	4.04	4.50	<b>4.44</b>
教員は授業の準備が良くできていた The teacher was well prepared for lessons	4.67	4.89	4.11	4.28	4.33	4.28	4.50	3.61	4.63	<b>4.37</b>
教員は全ての学生に対して平等であった The teacher was fair to all the students	4.58	4.74	4.11	3.76	4.10	4.12	4.76	3.22	4.46	<b>4.21</b>
遅刻した学生や授業を乱す学生に対する教員の態度は適切だった Appropriate action was taken against late or disruptive students	4.17	4.93	4.11	3.52	3.93	4.04	4.38	3.35	4.08	<b>4.01</b>
授業の進捗は適切だった The pace of the materials presented in class was appropriate	4.25	4.74	3.78	3.52	3.90	4.32	4.38	3.57	3.88	<b>4.04</b>
教員はアクティビティと教材に関して、明確に説明した The teacher clearly explained activities and materials	4.51	4.68	4.00	3.88	3.90	4.24	4.59	3.13	4.33	<b>4.14</b>
授業中教員にアプローチしやすく、必要に応じて助けを提供してくれた The teacher was approachable and available to provide help during, and after lessons	4.88	4.85	4.11	4.28	4.33	4.56	4.82	3.13	4.50	<b>4.40</b>
教員は質問やコメントに丁寧に回答してくれた The teacher responded well to questions and comments	4.88	4.95	4.22	4.16	4.24	4.52	4.82	3.04	4.58	<b>4.39</b>
課題に対する教員からのフィードバックは適切だった The teacher gave appropriate feedback about assigned work	4.50	4.74	4.00	3.60	3.81	3.92	4.56	3.13	4.21	<b>4.05</b>
教員は熱心に取り組んでいた The teacher was enthusiastic in teaching	4.79	4.84	4.11	4.32	4.29	4.28	4.85	3.48	4.62	<b>4.40</b>
教員はモチベーションや興味を促すような授業をした The teacher created motivation and interest in the course	4.63	4.79	3.67	3.72	3.90	3.88	4.65	3.91	4.29	<b>4.05</b>
総合的に、授業は効果的だった Overall, the teaching in the course was effective	4.58	4.74	4.00	3.64	3.86	3.96	4.59	3.13	4.17	<b>4.07</b>



議論：

全体的にみて、2009/2010 学年度における BECC の教員に対する満足度は、高いから非常に高いという結果が得られた。昨年度の回答では、主として情報を分かりやすく説明すること（話すスピード、やり方の説明の難解さ、指導したことに対するチェック）とフィードバックの必要性が強調されていた。本年度の結果では、授業の内容に関してはおおむね高い評価を得たものの、フィードバックは引き続き注意を要する分野となっている。

## 2. コース評価：1 年生の英語

BECC の 1 年生の英語のクラスに参加した全学生は、参加したコース、教員と授業内容、カリキュラム、および学生たちの目標達成とコースの目的に関するフィードバックを提出する機会が与えられた。

このセクションにおいては、コースと評価調査の結果を概観する。

### 大学 1 年生の英語調査結果総論

\* 1 年生の英語は、英語によるコミュニケーションとワークショップの合同授業となっている。

Curriculum Feedback Responses: Freshman English	強く否定する	否定する	ふつう	共感する	強く共感する	Rating Average
授業目的や授業に関する情報が明確に示され、また文書にて授業に関する情報が与えられた The course objectives and information about the course was stated clearly, and I was given clear handouts with information about the course	1	2	93	130	68	3.89
授業内容は、シラバスやコース概要に記述されていた目標や目的と合致している The course content matches the goals and objectives outlined in the syllabus and course handouts	0	5	97	140	52	3.81
授業で使った教材の難易度は、私の予想した通りのレベルである The difficulty of the material in this course meets my expectations for a course at this level	3	34	129	96	32	3.41
評価方法は、授業の内容にふさわしい The method(s) of assessment are appropriate to content of the course	3	9	83	132	67	3.85
授業の規模が効果的な学習を促進したか The size of the class facilitated effective learning	1	18	107	122	46	3.66
授業で英語を使う機会が十分にあった There were sufficient opportunities to use English in class	2	3	45	114	125	4.23
他の学生と一緒にアクティビティに取り組みながら学習に役立った Working on activities with other students helped me to learn	2	9	67	127	89	3.99
ホームワークアクティビティのおかげで授業で学んだことをさらに深く学べた The homework activities helped me to further develop the material covered in class	5	28	112	109	40	3.51
授業のおかげで他の国や文化により理解を深めることができた The course has improved my understanding of other countries and other cultures	2	10	82	126	74	3.88
英語の自己学習能力が上がった My ability to study English independently has improved	10	36	120	102	26	3.33
授業のおかげで英語のコミュニケーション能力が上がった The course has improved my English communication skills	4	27	98	119	46	3.60
授業のおかげで英語に関心が深まった The course has developed my interest in English	7	37	95	110	45	3.51
英語を学ぶモチベーション「頑張るよ」と思ふ気持ち」がさらに上がった My motivation to study English further has increased	9	34	92	106	53	3.54

議論：

総体的に、1 年生の英語コースに対するフィードバックは非常に肯定的で、去年のフィードバックを基に 1 年生の英語教材を改訂した努力が報われた形になった。改善された点として、コースに関する情報の説明、伝達の仕方、コースの目的と教材との整合性の改善、クラスの人数に対する満足度の改善、英語学習に対する意欲が高まったと報告した学生、およびコース終了後に英語に対する関心が高まったと報告した学生の顕著な増加が挙げられる。最後に、おそらく最も歓迎すべき点として、宿題に対する学生の評価が前向きな結果となったことが挙げられる。

対応策：

学生および教員からのフィードバック（現在リー・アトキンソンが調査中）は、「理想とされる」目標とコースの目的に、また状況設定型によるシラバスと教材に関してある一定の乖離が存在することを示している。従って 2010/2011 学年度には、コースの目標と目的の見直し、「達成目標要約」目的（すなわち、BECC プログラムが「できること」）の見直しが提案される。

次に考察される分野は、セルフ・アクセスの統合をさらに改良すること、その目的のために、1年生を対象にした新しい現在進行型の「オリエンテーション」が企画され、新学年度に導入される予定である。

## 2. コース評価:2年生の英語

このセクションでは、2年生の英語クラスにおけるコースと評価調査の結果を概観する。

### 大学2年生の英語調査結果総論

\* 2年生の英語は、2年目の英語によるコミュニケーションとワークショップの合同クラスとなっている。

Curriculum Feedback Responses: Sophomore English	強く否定する	否定する	ふつう	共感する	強く共感する	Rating Average
授業目的や授業に関する情報が明確に示され、また文面にて授業に関する情報が与えられた The course objectives and information about the course was stated clearly, and I was given clear handouts with information about the course	2	7	116	86	22	3.51
授業内容は、シラバスやコース概要に説明されていた目標や目的と合致している The course content matches the goals and objectives outlined in the syllabus and course handouts	0	7	116	89	21	3.53
授業で使った教材の難易度は、私の予想した通りのレベルである The difficulty of the material in this course meets my expectations for a course at this level	10	47	120	43	13	3.01
評価方法は、授業の内容にふさわしい The method(s) of assessment are appropriate to content of the course	3	13	106	86	25	3.50
授業の規模が効果的な学習を促進したか The size of the class facilitated effective learning	9	27	123	64	10	3.17
授業で英語を使う機会が十分にあった There were sufficient opportunities to use English in class	2	7	75	89	60	3.85
他の学生と一緒にアクティビティに取り組むことが学習に役立った Working on activities with other students helped me to learn	3	12	82	96	40	3.68
ホームワークアクティビティのおかげで授業で学んだことをさらに深く学べた The homework activities helped me to further develop the material covered in class	11	34	125	51	12	3.08
授業のおかげで他の国や文化により理解を深めることができた The course has improved my understanding of other countries and other cultures	3	10	68	109	43	3.77
英語の自己学習能力が上がった My ability to study English independently has improved	13	47	113	53	7	2.97
授業のおかげで英語のコミュニケーション能力が上がった The course has improved my English communication skills	9	31	98	81	14	3.26
授業のおかげで英語に関心が深まった The course has developed my interest in English	13	34	105	61	20	3.18
英語を学ぶモチベーション(「頑張ろう」と思う気持ち)がさらに上がった My motivation to study English further has increased	14	47	105	52	15	3.03

#### 議論:

2年生の英語クラスに対するフィードバックも総体的には肯定的だった。しかしながら、明らかに、2年生の英語クラスに対する評価は1年生の英語クラスほど高くはなかった。本コースが2009年度に開講したことを鑑みれば、これはある程度は当然ともいえる。肯定的な評価を得た分野として：授業中に英語を使う機会、クラスの学生数に対する満足度、そして他の学生との学習が挙げられた。教材の難易度、情報の分かりやすさ、コースの目的と教材との整合性、評価方法に関する学生たちの回答は、総じて矛盾する二面性を持っている。最後に、出される宿題の量に関して一貫したコメントがあり、注意を要する分野がいくつか存在することを示している。しかしながら、最も気になる結果は、自習能力がどの程度伸びたか、あるいは伸びなかったかという学生の認識の度合いに関するもの（この件に関して肯定的、または非常に高く評価した学生の割合は3分の1以下である）で、さらに、英語の勉強により意欲が高まったと回答した学生は30%以下となっている。これは、コースが、学生の英語に対する関心を深めるという BECC プログラムの総合的目標にうまく対応していなかったことを示唆するものである。

#### 対応策:

全体的に見て、2年生の英語コースは、カリキュラムの目的、シラバスの構成、教材のレベルに注意を払う必要があることは明らかである。教員からのフィードバック（リー・アトキンソンが調査中）はこの結論を裏付けている。この目的のために、2010/2011年度に、2年生の英語コースの目標と目的から始まって、教材の修正、コースの評価構成の変更へと進み、より多く

のライティングと構文に重点をおいた活動の一体化を図る方向で、全体的な見直しを行なう予定である。教員と学生からのフィードバックはどちらも、より多くの焦点を構文に当てた教材が望ましいと示唆しており、なんらかの文法/語彙の構築タイプを評価に追加することも検討されている。基本的なレベルでは、コースの情報をさらに分かりやすくする努力が求められており、学生に情報が明確に伝わるように傾注する必要がある。セルフ・アクセスの統合に関して1年生の英語コースに加える変更を2年生の英語にも当てはめ、SALC 活動と自習は、授業の“延長”というよりも、むしろより多くの選択と自由がある自立学習へと移行することになる。

### 3. コース評価：セルフ・アクセス英語

本章では、新設されたセルフ・アクセス英語クラスのコースと評価調査の結果を概観する。詳細は添付資料 C を参照ください。

#### セルフ・アクセス英語調査結果総論

\*セルフ・アクセス 英語とは 2009-2010 年度の言語学科の“英語の基礎演習” (Eigo Kiso Enshu) クラスを意味する。

Curriculum Feedback Responses: Self-Access English	強く喜ぶ	喜ぶ	ふつう	共感する	強く共感する	Rating Average
授業目的や授業に関する情報が明確に示され、また文書にて授業に関する情報が与えられた The course objectives and information about the course was stated clearly, and I was given clear handouts with information about the course	0	0	0	7	3	4.30
授業内容は、シラバスやコース概要に説明されていた目標や目的と合致している The course content matches the goals and objectives outlined in the syllabus and course handouts	0	0	0	9	1	4.10
授業で使った教材の難易度は、私の予想した通りのレベルである The difficulty of the material in the course meets my expectations for a course at this level	0	0	2	6	2	4.00
評価方法は、授業の内容とふさわしい The method(s) of assessment are appropriate to content of the course	0	0	2	7	1	3.90
授業の規模が効果的な学習を促進した The size of the class facilitated effective learning	0	0	1	8	1	4.00
授業で英語を使う機会が十分にあった There were sufficient opportunities to use English in class	0	0	0	6	4	4.40
他の学生と一緒にアクティビティに取り組むことが学習に役立った Working on activities with other students helped me to learn	0	0	3	6	1	3.80
ホームワークアクティビティのおかげで授業で学んだことをさらに深く学べた The homework activities helped me to further develop the material covered in class	0	0	4	5	1	3.70
授業のおかげで他の国や文化により理解を深めることができた The course has improved my understanding of other countries and other cultures	0	0	3	5	2	3.90
英語の自己学習能力が上がった My ability to study English independently has improved	0	0	1	9	0	3.90
授業のおかげで英語のコミュニケーション能力が上がった The course has improved my English communication skills	0	0	5	4	1	3.60
授業のおかげで英語に関心が深まった The course has developed my interest in English	0	0	4	4	2	3.80
英語を学ぶモチベーション「頑張ろうと思う気持ち」がさらに上がった My motivation to study English further has increased	0	1	1	8	2	3.90

#### 議論：

セルフ・アクセス・コースに対するフィードバックは総じて肯定的であり、2 学期には 1 学期よりも評価が高くなると期待される。（これは、それまでセルフ・アクセスに対する概念のなかった学生には 1 学期には難しく思われると予想された）。このクラスはほかのクラスとは異なっているが、2 学期には学生たちは一人で（指導は付くものの）勉強することに対する違和感は消えると思われる。改善が見込まれる分野として、独学 (independent learning) に対する学生の自信を高めること、および、学習を“知ること”と学習を“すること”とのつながりを明確にするという 2 点が挙げられる。

#### 対応策：

1 学期に、クラス活動と教材に多少の修正が加えられ、内容面での実践的応用をより明確に強調することになる。これは最初の反復として起きたが、しかしながらより明快にする必要があるだろう。学習上の成功と失敗が学生の自信に大きく反映される以上、2 学期に学生はより管理しやすい独学プロジェクトへと指導される（本年度に難しいプロジェクトを取った学生の中には、目立った成果を上げられなかった学生がいる）。これは学生たちにより肯定的な学習の成

果を体験させるようにするためであり、それが、独学能力に対する学生たちの自信を高めることになる。

## D. 研究と教材設計

### 1. はじめに

本章の目的は、2009/2010 学年度における BECC 教員および学習指導チームの、個々の研究と教材活動を概説することである。

2009/2010 学年度に、BECC では、様々な研究が広範囲にわたって行われた。BECC の教員はその専門的知識を高め、文献の出版、また日本国内および国際会議でのプレゼンテーションを通して言語教育分野の研究に貢献した。4.2 章では、個々の教員による貢献を詳述するとともに、BECC の教員が提出した研究記事や論文を添付資料 D に掲載する。

### 2. 個々の BECC 教材と研究活動要約

(各スタッフメンバーが提出)

#### a. ジーン・トンプソン

2009 年、ジーンはグローバル・コミュニケーション学科と密接に連携して、新しい学科のコミュニケーションのための語学コース用カリキュラムとシラバスの文書化を立案した。2 学期にはまた、リー・アトキンソン、カースティン・マシンスターと共に、来年度に実施されるリーディング戦略とライティング戦略コースのレッスンの計画と見直しに取り組んだ。カリキュラムディレクターとして、ジーンはまた、神田外語大学のメディアエンジニアとともに、BECC で使用する KEPT テストの完全ビデオ版を 3 部開発し、BECC コースの評価調査を修正した。ジーンはリー・アトキンソンと共著で“我らの体験：セルフ・アクセスをカリキュラムに統合する”を脱稿し、その論文は、6 月の香港での ILA 会議で実施されたワークショップを基にした KUIS ワーキングペーパーに掲載され、また、香港での国際会議では、「語学学習の最大化環境の構築」というタイトルのポスターを発表した。さらに、ジーンは九州の崇城大学において語学学習に関する学生の態度と信念の調査研究を行い、引き続き来年度に BECC でその調査を行う計画である。

#### b. ケイレブ・フォール

2009-10 年度、ケイレブは SALC が収蔵する教材と機器類の補充を担当した。さらに SALC の管理システムの一部向上を図り、パートタイム・スタッフの訓練と育成を担当するアシスタント・マネージャーに対して指導を行った。さらにアドバイザーとして働き、SALC の課外活動の発展にも貢献した。ケイレブは本年、ラーニングアドバイザーのプロとしての向上に焦点を当てた研究を行った。その研究をトピックに、小館梓と共にある本の 1 章を書き上げ、それは現在同僚によって見直しされているところである。加えて、彼はオーストラリアの QUT の教育博士課程研究のコースワークの一部を終了し、現在、日本の第三次的教育背景における主体的学習に焦点を当てた調査質問の開発に取り組み始めている。

#### c. ヘイミッシュ・ギリーズ

本年度はカリキュラムの発展には極めて多忙で生産的な一年であった。一年を通して、ヘイミッシュはブライアンと緊密に協調して、リスニングとライティングのスキルを重点に、かつリーディングの要素も幅広く取り入れながら、BECC 最初の 3 年生の英語コースの教材を作成した。さらに、ヘイミッシュは 1 年生と 2 年生の授業用に、音声と視覚を伴うウェブサイトを作成した。本年度の大部分の時間を教材開発に費やしながらも、ヘイミッシュはまた研究も行った。ケイレブとの共同企画で、学年の始業と終業時期に、彼は本学の学生の語学学習に関する信念に関する BALLI 調査の控えを完成させた。さらに、彼の BECC の学生のニーズ分析に関する調査報告書は文教ジャーナルに掲載された。来年度の研究計画として、ヘイミッシュはブライ

アンと共同で、BECC と KUIS の学生を比較しながら、語学学習者の意欲を失わせる点、再びやる気を起こさせる点を解明する RILS 企画の実施を申請した。

d. ジャック・パウワー

ジャックは 2009/10 学年度に、文教の学生を対象に、ライティングの課題におけるインターネットの機械翻訳の使用に関する調査を行った。ポर्टフォリオのライティング課題のために学生がインターネットの機械翻訳を使用したその頻度や方法を探り出すために BECC の全 2 学年クラスを対象に行われた調査を取り仕切った。調査を終えた後で、頻繁にインターネットの機械翻訳を使用したと報告した学生による、声高に考える実験が行われた。調査の結果は 2009 年 6 月の東京における JALTCALL で発表され、声高に考える実験の結果は 2010 年 2 月の Cam TESOL で発表される。ジャックはまた、ウェスタン・シドニー大学のサトミ・カワグチとの共著による、「日英タンデム型オンライン学習：語学学習における個人教授と学生の一人二役」というタイトルの論文を技術と語学学習 誌に提出した。現在、論文は誌の審査員によって審査中である。ジャックはさらに BECC の語彙テストの形式を改善すべく、語彙テストに関する文献に目を通したが、BECC の語彙テストにはさらに多種多様なタイプの質問を取り入れることが推奨される。さらに、語学教育ワーキングペーパー (Working Papers in Language Education) 誌にカリキュラムの強化：EFL カリキュラム評価におけるケース・スタディというタイトルの論文を出版した。これは、BECC の 1 年生のカリキュラムが更新された最初の年を文書にまとめ評価したものである。カリキュラム編成の任務を遂行すべく、ジャックは新規のメディア英語コースに合計 22 のレッスンを作成したが、これは来年度からグローバル・コミュニケーション学部の一部となる。さらに、ジャックは 1、2 年生のカリキュラムの修正および新規教材にも積極的に貢献した。加えて、BECC の教員たちが KUIS 図書館から本を貸し出す際の業務をも担当した。

e. リー・アトキンソン

2009/2010 学年度の 1 学期、リーとエヴァンは 2 年生の英語カリキュラムのフィードバックの回収と実施を調整する責任者だった。この目的に向けて、教員用小冊子が作成され、スタッフ一同と公式、非公式な会合が開かれた。本年、リーは新しい 2 年生の英語カリキュラムの効果性を評価する調査を行った。その調査の一部として、リーはジーンと緊密に連携をとり学年末カリキュラムと教員評価調査の最新化を図ったが、その調査は 1 年生と 2 年生の英語クラスの全学生を対象に行われる。2 学期に、リーとカースティンはグローバル・コミュニケーション学科のために二つのライティングコースの構成と、新規学科に KUIS のリーディング・ベーシックコースを採用する責任者を務めた。FD 委員会における彼女の任務の一部として、リーはワークショップと教員のためのフォーラムの組織化を支援し参加した。また、新規スタッフのための初めてのワークショップと 2010 年 2 月にオーストラリアを訪問する文教の学生のためのワークショップを行った。本学年度にリーは二つの国際会議に出席した。2009 年 6 月には香港で開催された自立学習協会会議で、「教室における対話、反省と学習者責任の促進」というタイトルの彼女の論文を発表した。同会議において、ジーンと共に「セルフ・アクセスをカリキュラムに取り入れる：我われの体験」というタイトルでワークショップを開催し、「語学学習の最大化環境の構築」というタイトルのポスターを発表した。2010 年 2 月、彼女はカンボジア TESOL 会議で、「カリキュラム評価の課題と報酬」というタイトルのワークショップを開催し、「学習者の語彙レベルとカリキュラム間のギャップのかけ橋」というタイトルの論文を発表する。本年彼女はワーキングペーパーを出版し、また語学教育誌にジーンとの共著によるワーキングペーパーを出版した。さらに、広島文教女子大学広報 (Bulletin of Hiroshima Bunkyo Women's University) に別の論文を出版した。

f. ブライアン・マクミラン

本年、ブライアンはハミッシュと共に、2010/2011 学年度に実施される 3 年生のリスニングとリーディング・コースの構成にあたった。また彼の学生の特異なニーズに合わせるために既存の 1、2 年生の教材を採用した。会議での発表に関しては、ブライアンは 6 月に埼玉で開かれた 2009 年 JSLS 会議でデミアン・リヴァースと共にポスターを発表し、さらに、ポール・ジョイス

と共に9月に熊本で開かれた JAICS 会議で、活気あるクラスと活気のないクラスに関する論文を発表した。さらに、2月のCam TESOL 会議で、活気に関する別の論文を発表する予定である。活気あるクラスと活気のないクラスにおける学生の学習体験上の認識に関する彼のRILS論文はRILS誌に提出された。来年度、彼とハミッシュは、やる気をなくすものと再びやる気を起こさせる背景と BECC と KUIS の学生比較を調査する JILS の共同企画を申請した。さらにある本のために共著で執筆したある章が、外国語と第2言語学習における最初の言語使用 (First Language Use in Foreign and Second Language Learning) (Turnbull & Daily-0' Cain 出版社、2009年)として出版され、また JALT の 語学教師 (The Language Teacher) のコピー編集およびプルーフリーダーとして月に数時間ボランティアを行った。

#### g. エヴァン・ジョーンズ

1学期、エヴァンはリー・アトキンソンと共に、1年、2年生のカリキュラムの全般的な開発、特にスピーキングと語彙テスト教材の開発に貢献した。2学期には、他の教員からの提案を受けて、1年と2年生のレッスンの大半の最新化と編集に取り組んだ。BECCカリキュラムを改良すべく、エヴァンは1学年のある担当クラスにおいて、広範囲に及ぶリーディングプログラムを開発し実験した。このプログラムは彼の研究企画に関連していた。関連する学生調査の結果が分析され、2010年2月のCAMTESOL 会議で発表される。教材や研究に加えて、エヴァンは学生活動委員会においてはコーディネーターとして議事進行係を務めた。1年を通して、HBJDのオープン・キャンパス、ハロウィーン・パーティや年末のクリスマス・パーティにおける教員の活動を組織した。

#### h. カースティン・マシントナー

カースティン・マシントナーは2009年10月1日、2学期の始業日にBECCで働き始めた。BECCにおける最初の4ヶ月間、彼女が担当した任務は以下のとおりである：

1. リー・アトキンソンと共に、グローバル・コミュニケーション学部 (GCD) のために1年生用のリーディングとライティングのカリキュラムの開発；
2. 1年生の英語3と2年生の英語4を担当；
3. SALCの任務の遂行；そして、
4. 学生活動委員会への参加。

週に約10コマを担当する彼女の時間の大部分は、GCDコースのリーディングの基本1、リーディングの基本2、ライティングの基本1、およびライティングの基本2の開発に向けられた。BECCにおける彼女の任務の他に、彼女はJALTで11月に「携帯を使ったクラスの一貫性の強化」というタイトルの発表を行ったが、それは彼女が担当する1年生の英語クラスで10月と11月に行った企画に基づいていた。さらに、彼女は、トルコのアンカラ市のある同僚に、トルコの英語によるアクセス・マイクロスカラーシップ・プログラム (ACCESS Microscholarship Program) に関与している教員たちのためのEFL写真企画の設立に向けた指導を行った。

#### i. ルーク・カーソン

本学年度において、ルークは間もなく出版される二つの論文を執筆した。その論文は；

1. 自主性 - 組織的努力 (神田 RILS 誌の次号)
2. SALC を定期的に使用している人は効果的な自主学習者としての特徴を明確に備えているか? (広島文教女子大学誌の次号)

ルークはまた、自主的学習に焦点を当てつつ、学習におけるメタ認知 (変化認知) が果たす役割を研究している。これまでのデータ分析では、メタ認知の理論的モデルと実際に起きる過程との間にはギャップがあることが示されている。特に、これらのギャップはメタレベルの機能が支配し効果を及ぼす過程 (認知的および感情的な過程の間には強く重なり合う部分がある

と思われる)、および、メタレベルと目的レベル間における活動の方向性、因果関係、複雑さに関連している。この研究は現在も続いている。

1 学期には、SALC が所有する教材はスタッフと学生にとって実践的ではなく、すべて変更された。2 学期には、教員と学生の教材に対するフィードバックに基づいて、さらに徹底した改訂がなされた。これら改訂の目的は以下に示すとおりである。

- 学生をセルフ・アクセス学習に導く より段階的なステップを提供する、
- SALC 活動に対する学生の否定的な考えに対処する、
- 繋がりのない学習ではなく、より統合的な学習体験へと移行すること。

#### j. 小館梓

学年を通して、小館はケイレブ・フォールとルーク・カーソンと協力して SALC の課外活動の発展と改善に貢献した。学生の独学に向けた姿勢を育て、セルフ・アクセス学習に対する認識を高めるために多彩な活動を開発した。その中には、ゲームをベースにした活動、言語に焦点を当てた活動、そして活動全体が主体性に向けて前進するような学習戦略に焦点を当てた活動が含まれている。企画の一環として、小館はセルフ・アクセス学習とは何か、どのようなものか、SALC、ラーニングアドバイザー、また来年度に新しく入学する 1 年生向け SALC アクティビティ\* に関する映画をベースにしたオリエンテーションの制作に貢献した。さらに、小館は、成功した例の 1 つとして、学生に英語学習における創造的効果的な方法を紹介する目的で、既存の文教の学生の英語スタディノートを使用して、SALC 内で使用する新しい教材を開発した。

去年の報告にあるように、小館は KUIS で始めた学習アドバイザーのための職業開発プログラムの研究企画に再び着手した。この企画に基づき、彼女は主たる著者として、共同で執筆にあたったケイレブ・フォールと共に、質的研究を中心にした本に、「語学学習のアドバイスにおける専門的発展の源としての実践のコミュニティ」というタイトルである章を提出し貢献した。2010 年 1 月にハワイでの国際教育会議でその研究を発表した。来年度にもさらに研究を続け、学習アドバイザーのための職業開発体制の実際の組織と実施に焦点を当てていく。さらに、小館は、別の研究企画にも取り組んでおり、文教の学生を対象に映画や歌を使ったより一般的な教材の効果のレベルを調査した。1 年生と 2 年生を対象にコンピュータをベースにした調査を行い、現在データの回収過程が終了した。彼女は 2010 学年度にはデータ解析過程に取り組む予定である。

## E. 結論

文教イングリッシュ・コミュニケーション・センター (BECC) は、2008 年の 4 月 (クラスとカリキュラム企画) に、および同年 9 月 (文教 SALC) に開設された。本報告書において、BECC の運営 2 年目における SALC とカリキュラムに関する業績と主要なデータを概観し解釈し、企画を成功に導いた要因と、2010/2011 学年度に注意を要する分野とを考察した。

去年直面した大きな課題の後で、2009 年は全体として、統合と確かな改善への年となった。コース評価のデータは、去年の経験に基づいて 1 年生の英語教材と SALC の活動を改善した我々の能力により、本年に入学した 1 年生の体験は明らかに向上したことを示している。さらに、pre student day を通しての BECC の参加は新入生にとっての「予習」(pre-study) であり、学生にとっては、広島文教女子大学へ入学する前に BECC の知識を得る素晴らしいチャンスとなった。

課題は残っている。2 年生の英語カリキュラムの改良は、グローバル・コミュニケーション学科の開設とコミュニケーション言語クラスの支援に BECC が果たす役割がもたらす課題への対処と同様、2010 年における大きな目標である。フィードバックの仕組みの改善、またフィードバックを確実に学生に有益となすことは、教員チームにとって研究への方向付けとなる分野である。SALC にとっては、SALC サービスの開始時の成功を土台に、サービスのさらなる自主的使用の奨励は重要な目標であり、さらに、SALC へのオリエンテーション・プログラムとカリキュラ

ムに含まれる SALC の活動を通じた SALC サービスの改良は、2010/2011 年度のさらなる発展に向けた主要な分野である。

結論として、2009/2010 学年度は、統合、発展、改良の 1 年であった。2010/2011 年度は、英語コース全般としてはさらなる統合と改良の年であり、グローバル・コミュニケーション学科コースに関与するメンバーにとっては、創造と教材テストの 1 年となることが予想される。最後に、BECC の発展に伴い、BECC プロフェッショナル ライブラリーを含めて、進行中の FD 活動を通じた人材育成の発展、および、ワークショップの開催や活動の継続を通して、スタッフの能力を最大限に引き出し文教の学生の教育上のニーズに応えていくこと、BECC の日々の発展に貢献することが重要な課題であると信じる。

ケイレブ・フォール  
BECC SALC ディレクター

ジーン・トンプソン  
BECC カリキュラム・ディレクター

2010 年 2 月 12 日